

平成 22 年 4 月 26 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20791738

研究課題名 (和文) 父親の育児参加支援プログラムの開発

研究課題名 (英文) Development of the program to support fathers' commitment to parenting

研究代表者

小山 里織 (KOYAMA SAORI)

県立広島大学・保健福祉学部・助教

研究者番号：40458089

研究成果の概要 (和文)：本研究の目的は、父親の育児行動における実態を調査し、父親の育児参加支援プログラムを開発することであった。父親の育児行動は、子どもの月齢に応じて回数が増えるものと減るものがあることが示された。そして、その変化は子どもの発達の影響を受けることが示唆された。また、父親の sensitivity には父親のわが子への愛着が関連していることが示唆された。これらの結果から、子どもの月齢の早い時期に父親たちが行動レベルで変化すること、そこには父親の心理的な要因影響していることが実証的に明らかにされたといえる。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this study was to investigate the conditions of fathers' parenting behavior at present day to develop the program to support the fathers' commitment to parenting. The results showed that some kind of parenting behavior, such as holding, are increased depending on the development of their infants, while some other kind of parenting behavior, such as putting down, are decreased, indicating that fathers' parenting behavior are influenced by the infants' development. In addition, fathers' sensitivity was related with the paternal attachment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：父親，子育て

1. 研究開始当初の背景

近年、女性だけでなく男性も子育てに関わろうとする動きが見られつつある。しかし、依然として育児の担い手は女性である。男性の中には「そもそも男と女は違うのだから、同じ仕事をする必要はない」「女性は子

どもを生む機械」という考えをもつ人もいる。本当に父親と母親の違いはあるのか。あるとすれば何が異なるのか。

育児が経験を通して習熟することは、比較行動学のアカゲザルの研究で明らかにされた。人間においても、母親は出産後に突如

として母親としての行動がとれるのではなく、子どもとの関わりを通して育児行動を習熟させることが知られている（大日向, 1988）。

申請者は、現在までに母親のわが子に対する愛着の発達を通して母親の発達に関する研究を行ってきた。そこでは、妊娠初期から生後 36 ヶ月まで母親の愛着が発達することが示された（佐藤, 2004, 2005, 2006）。また、母親の愛着は母親の養育行動の決定因となること、そして、結果として子どもの発達に影響することが明らかにされた。これらの知見から育児行動の習熟には子どもとの関わりによって得られる心理的側面の発達が関与しているといえる。

近年、子どもの発達に父親の育児関与が影響力をもつことや、夫婦関係が父親の育児関与と関連することは示されている（福丸ら, 1999; 加藤ら, 2002）。これらの先行研究は父親の育児行動を取り上げたものであるが、育児行動の習熟や、その決定因が何かについて検討したものではない。母親の発達を父親に適用すると、父親も発達する存在であると考え、父親は育児行動を習熟させるのか。習熟させるとすればそのプロセスに父親の心理的な側面が影響を与えるのか。父親と母親の違いはあるのかといった問題は全く研究されていない。

2. 研究の目的

本研究では、父親の育児行動の解明のために、母親の発達研究の成果が適用できるのではないかと考え、以下の 3 点を検討することを目的とした。

(1) 父親は育児行動を習熟させるのか。：妊娠期から出産後一定期間、父親の育児行動についての縦断データを収集し、その個人差や変化を検討する。

(2) 父親の育児行動の習熟に父親のわが子への愛着は影響するのか。：出産後の父親の育児行動にわが子への愛着が影響するのかについて検討する。

(3) 父親と母親の育児行動の習熟プロセスに違いがあるのか。：父親と母親の育児行動について調査し、両者の個人差の程度、変化についての比較を行う。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者 第 1 子を出産予定の夫婦 62 組。そのうち妊娠後期、生後 1 ヶ月、2 ヶ月、4 ヶ月のすべての時期データ収集できたのは 25 組、2 ヶ月と 4 ヶ月の観察データが収集できたのは 31 組であった。そのため、

25 組の夫婦を分析対象としビデオデータの分析のみ 31 組の夫婦を分析対象とした。対象者の年齢は妊娠後期の時点で、父親 32 歳 (SD=5.02)、母親 30 歳 (SD=3.35) であった。

(2) 調査時期 2008 年 7 月～2009 年 6 月。

(3) 手続き 市町村で開催されるパパママ教室で行った。いずれの時期も質問紙調査を行い、2 ヶ月と 4 ヶ月には家庭で親子遊び(観察用のおもちゃを用いてのあやしと自由遊び)をしているシーンを父親と母親それぞれ各 3 分間、ビデオ観察した。

(4) 調査内容 ①育児行動:「抱く」「寝かしつけ」「入浴(沐浴)」「授乳」「げっぷ」「おむつ(尿)」「おむつ(便)」「着替え」「遊び」「お守り」の 10 項目について、平日、休日それぞれ一日の実施回数をたずねた。

② Sensitivity: Emotional Availability Scale (Bringen, et al., 1998) の中の sensitivity 尺度 (9 段階) を用いた。「9.非常に sensitive」から「1.非常に insensitive」の 9 段階で評定を行った。ランダムに選択した 6 カップル 12 ケースについて、筆者以外の心理学研究者 1 名が評定した。評定が一致した率は.88 であり、1 段階以上の評定のズレは協議の上で決定した。

③育児経験:「抱く」「入浴(沐浴)」「授乳」「おむつ(尿)」「おむつ(便)」「着替え」「遊び」「お守り」について、どの程度経験したことがあるかたずねた。

④わが子に対する愛着:胎児愛着尺度(高橋ら, 1996) 10 項目、母親の愛着質問紙(中島, 2002) 8 項目を用いた。父親には、これらの質問紙を父親用に修正したものを用いた。

4. 研究成果

(1) 育児行動の実態

Figure1 と Figure2 は、1 ヶ月、2 ヶ月、4 ヶ月における父親と母親の一日における育児行動 (10 項目) の平均回数を示したものである。平日と休日を合算して一日の平均回数を算出した。10 項目の育児行動について一要因の分散分析を行ったところ、父親の育児行動のなかで子どもの月齢にともない回数が有意に増加した項目は、「抱く」(F (2,48) =5.47, $p<.01$), 「入浴(沐浴)」(F (2,48) =12.50, $p<.01$), 「遊び」(F (2,48) =4.15, $p<.05$), 「お守り」(F (2,48) =3.51, $p<.05$) であり、有意に減少した項目は「寝かしつけ」(F (2,48) =6.79, $p<.01$), 「おむつ(便)」(F (2,48) =5.29, $p<.05$) であった。一方、母親の育児行動においては、有意に上昇した項目はなく、「寝かしつけ」(F (2,48) =6.09, $p<.01$), 「授乳」(F (2,48) =8.06, $p<.01$), 「げっぷ」(F (2,48) =7.10, $p<.01$), 「おむつ(尿)」(F (2,48) =7.04, $p<.01$), 「おむつ(便)」(F (2,48) =37.60, $p<.01$) の回数

が子どもの月齢とともに有意に減少していた。

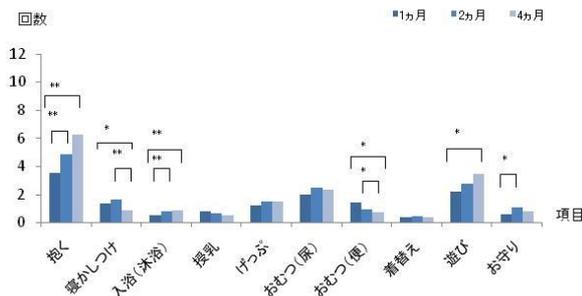


Figure 1 一日における父親の育児行動の平均回数

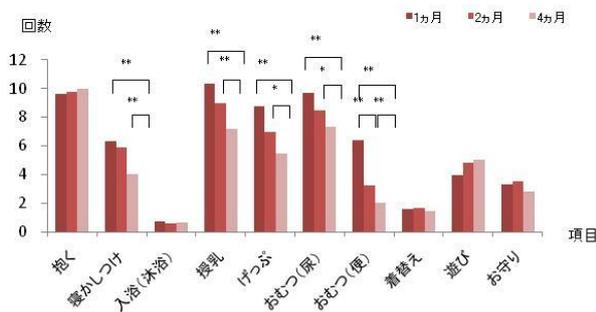


Figure 2 一日における母親の育児行動の平均回数

父親の育児行動の中で「抱く」「遊び」「入浴(沐浴)」「お守り」において、1ヶ月より2ヶ月及び4ヶ月の回数が増加した理由として以下が考えられる。1点は母子が母親の実家から帰宅したことで、父親と子どもの接触が可能になったことである。本研究の対象者25組のうち、「現在、お子さんと一緒に生活していますか」の問いに「はい」と回答した父親は、1ヶ月の時点で12人、2ヶ月では24人、4ヶ月では全員であり、2ヶ月以降ほとんどの父親が子どもと一緒に生活していた。「抱く」「遊び」「入浴(沐浴)」「お守り」の回数が増加した理由には、このような生活環境の変化が影響していると考えられる。もう1点は、子どもにとって2ヶ月から4ヶ月が社会・認知能力が出現し、発達する時期であるという点である。子どもは2ヶ月頃になると親の目を見るだけでなく、その顔に微笑するようになる。さらに4ヶ月になるとますます笑う回数は増え、声を出して笑うようになる。運動機能面においては手で物をつかんだり、物を口の中に入れるようになる。育児行動の回数の増加は、このような子どもの社会・認知能力の発達や、運動機能の発達により父親が子どもと関わりやすくなったことによると考えられる。菅原(1998)によると

子どもが1歳半の時点における父親の育児行動は、「入浴(沐浴)」「遊び」といった比較的難易度の低いものが多いという。本研究結果は先行研究と一致していると同時に、父親が関わる育児行動は乳児期から幼児期にかけて、難易度の低いものが選択されやすい傾向にあることを示している。

一方、「寝かしつける」「おむつ(便)」の回数が減少していた理由について、この傾向は回数こそ違いますが母親の育児行動の変化と類似していたことから、父親と母親に共通して子どもの生理的変化によるものと考えられる。

近年、父親の育児参加が増加してきていると言われている(厚生労働省, 2008)。しかし、本研究から父親の育児行動の実態は、母親に比べてかなり少ないということ、「抱く」「遊ぶ」など父親にとって比較的容易な育児項目は月齢とともに回数は多くなり、「おむつ」「寝かしつけ」などの項目では月齢とともに回数が減少することが実証的に示された。

②育児経験

それぞれの項目について、どの程度経験したことがあるか1回目(妊娠期)の調査でたずねた。Figure3とFigure4に父親と母親の育児経験について示した。

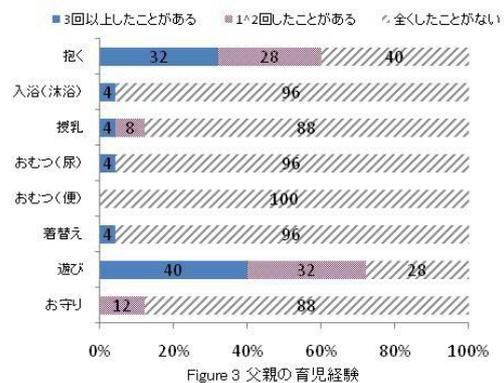


Figure 3 父親の育児経験

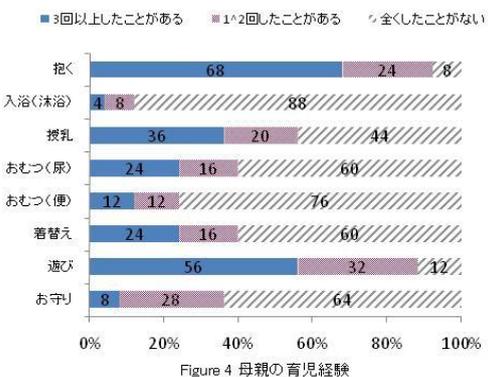


Figure 4 母親の育児経験

「抱いたことがある」「遊び相手をしたこ

とがある」において、父親たちの半数以上が一度は経験したことがあると回答していたが、それ以外の項目についてはほとんどの父親が未経験と回答していた。「抱く」「遊ぶ」といった行為は、子どものいない男性にとって比較的容易に経験できる項目といえるだろう。その一方、半数近くの父親がこれまで子どもと接したことがないと回答していた。母親の育児経験については「抱いたことがある」「遊び相手をしたことがある」について9割が経験ありと回答していたことから、女性の方が男性より子どもと関わる機会が多いことが伺われる。この結果は、出産後の父親と母親の育児行動の違いが、すでに妊娠期以前から始まっていることの可能性を示している。ただし、育児経験のそれぞれの項目において1割弱の男性が経験ありと回答していた。各項目の経験者が同一の対象であると仮定すると、ごく少数の男性は一通りの育児を経験していることになる。男性の場合、全般的には女性に比べて育児経験が少ないが、個人差が大きく女性並みに育児を経験しているものもいると考えられる。

③父親の養育行動の発達

2 ヶ月と 4 ヶ月における父親と母親の sensitivity の平均値を示したものが Figure5 である。

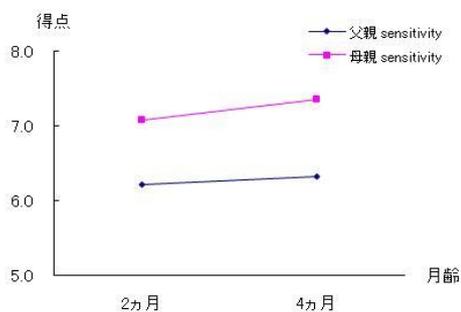


Figure 5 2ヵ月と4ヵ月における父親と母親のsensitivity得点

親 (2) × 時期 (2) の二要因の分散分析の結果、親と時期との有意な交互作用が認められた ($F(1,30) = 3.15, p < .01$)。単純主効果の検定を行ったところ、時期では母親において 2 ヶ月より 4 ヶ月の方が得点が高く ($F(1,30) = 12.9, p < .01$)、親では両時期とも母親が父親より得点が高いことが示された (2 ヶ月: $F(1,30) = 30.7, p < .01$; 4 ヶ月: $F(1,30) = 71.0, p < .01$)。これらの結果から sensitivity は、父親よりも母親の方が高く、母親は生後数ヶ月の間に子どもの月齢にともない発達するが、父親においては短期間で発達しないことが示されたといえる。父親と母親の sensitivity の発達に違いが認められた点について、以下の

理由が考えられる。一つは、父親と母親の sensitivity の初期値が異なるという可能性である。Figure 3.4 に示したように父親と母親の育児経験にはかなりの差が認められたことから、すでに母親の sensitivity は初期値が高く発達しやすい状況にあるのではないかと。一方、父親は全般的に初期値が低く sensitivity が発達しにくい状況にあるのではないだろうか。もう一つは、子どもと関わる時間が異なるという点である。父親の育児行動は 1 ヶ月から 4 ヶ月にかけて「抱く」「遊ぶ」といった項目で子どもの月齢にともない増加することが示されたが、その回数は母親に及ぶものではなかった。Sensitivity が子どもとの関わりの中で発達するとすれば、子どもと接する量が多い母親の方が父親よりも発達しやすい状況にあるといえる。父親は母親と比較して子どもと関わる時間がかなり少ないことから、父親の養育行動が習熟するには母親よりも時間を要すると考えられる。

④わが子への愛着の発達

Table1 に 4 時点における父親と母親のわが子への愛着得点を示した。両者の妊娠期における胎児

	妊娠期			
	1ヵ月	2ヵ月	4ヵ月	4ヵ月
父親	38.8 (6.4)	28.0 (5.6)	29.2 (5.0)	29.2 (4.5)
母親	40.2 (5.0)	29.2 (4.0)	29.4 (4.5)	29.6 (3.9)

※()内はSDを示す

への愛着得点について対応のある T 検定を行ったところ有意差は認められなかった。出産後については、親 (2) × 時期 (3) の二要因の分散分析を行ったところ、交互作用は認められず、時期の主効果のみ有意傾向であった ($F(2,23), p < .10; 1 \text{ ヶ月} < 4 \text{ ヶ月}, p < .05$)。これらの結果から、わが子への愛着の強さは父親と母親とで差がないことが示されたといえる。子どもへの愛着は、母性愛とも言われ従来母親に備わったものと考えられてきた。しかし、本研究によって、父親にも母親と同様に子どもへの愛着があること、そしてその強さは母親と差がないことが示された。この結果は育児を母親の役割としてきた日本の文化に対して一石を投じるものといえるだろう。

⑤父親のわが子への愛着と養育行動の関連

2 ヶ月と 4 ヶ月における sensitivity とわが子への愛着との関連について検討したところ、4 ヶ月において父親のわが子への愛着と養育行動との間に正相関が認められた ($r = .41, p < .05$)。この結果から、子どもとの関わりが多くなる時期の父親の養育行動に対してわが子への愛着が重要となることの可能性が示唆されたと考える。2 ヶ月において相関が認められなかった点については、月齢が浅いほ

ど父親の個人差が影響しているのではないだろうか。育児の量から父親の sensitivity の発達のしにくさを考慮すると、今後より長期的な視点で父親のわが子への愛着と養育行動の関連について検討していく必要がある。

⑥父親と母親の養育行動の関連

2 ヶ月と 4 ヶ月における父親と母親の sensitivity の関連について検討したところ、2 ヶ月では有意な相関は認められず、4 ヶ月において有意な正相関が認められた ($r=.48, p<.01$)。この結果から 2 ヶ月から 4 ヶ月にかけて父親と母親は、子どもと関わる中で互いに影響し合っていることが伺える。2 ヶ月の時点で相関が認められなかったことについては、出産後から約 1 ヶ月間は夫婦が別々に暮らしていることから互いに影響しにくい状況であると考えられる。実際にビデオ録画からも、子どものあやし方や遊び方は夫婦間で似ているケースが多くみられ、その傾向は 2 ヶ月よりも 4 ヶ月に顕著となっていた。子どもの発達には父親と母親の補完性が重要であり、2 つのメカニズムは密接に関連し、父子間の遊びは母子愛着に依存している（子どもの欲求が満たされていることにより遊びが成り立つ）(Paquette, 2004) と指摘されている。また、前述したように sensitivity 得点は父親よりも母親の方が高いことから、sensitivity について父親は母親の影響を受けているのかもしれない。“似たもの夫婦”という言葉にあるように、夫婦は育児を通して似たものどうしになっていくのかもしれない。

⑦まとめ

本研究では、従来の母親の発達に関する研究の知見と方法を父親に適用しようと試みた。まず父親の育児行動については、子どもの月齢に応じて回数が増えるものと減るものがあることが示された。そして、その変化は子どもの発達の影響を受けることが示唆された。これらの結果から、1 ヶ月から 4 ヶ月という子どもの月齢の早い時期に父親たちが行動レベルで変化することが実証的に明らかにされたといえる。

また、本研究によって父親も発達する存在であること、その発達には父親の心理的要因、母親や子どもの発達が関連していることが示唆されたことは父親研究において新たな知見といえるだろう。特にこれまでの父親研究では、男性の生活実態に即して父親の発達が問われること少なかったことから、本研究結果は父親の発達をひも解く貴重なデータと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

- ① 小山里織、森山雅子、小林佐知子、長谷川有香、父親の育児行動に関する縦断的研究 (1)、日本発達心理学会、2010/3/26、神戸
- ② 森山雅子、小山里織、小林佐知子、長谷川有香、父親の育児行動に関する縦断的研究 (2)、日本発達心理学会、2010/3/26、神戸
- ③ 小林佐知子、小山里織、森山雅子、長谷川有香、父親の育児行動に関する縦断的研究 (3)、日本発達心理学会、2010/3/26、神戸

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小山里織 (KOYAMA SAORI)

県立広島大学・保健福祉学部・助教

研究者番号：40458089

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：